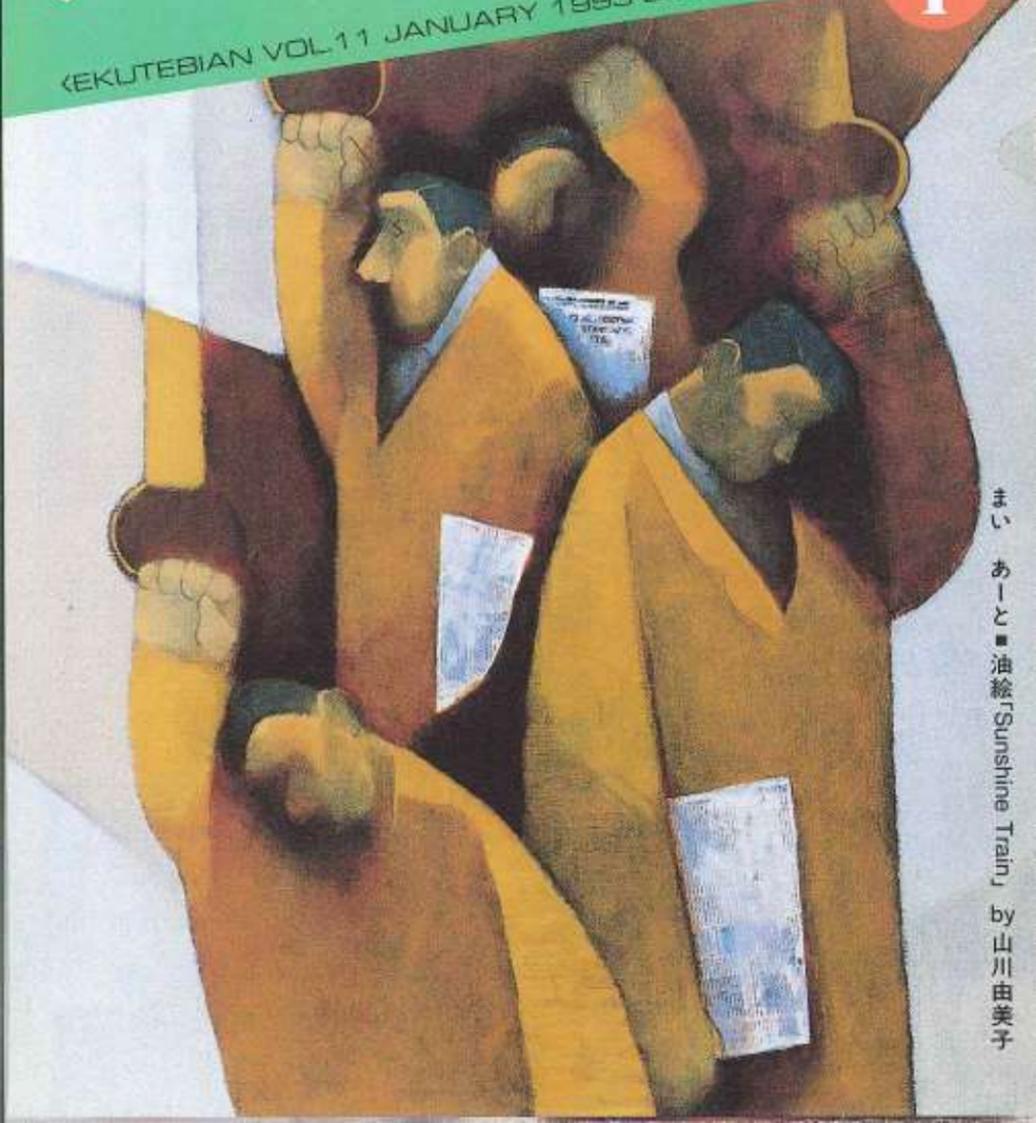
月刊
立川と語ろう　立川に生きよう
えくてびあん
1
〈EKUTEBIAN VOL.11 JANUARY 1993 EKUTEBIAN〉
まい　あーと■油絵「Sunshine Train」by 山川由美子

小林勇夫さんがフランス料理店『マルグリー』（錦町３丁目）を開店して、はやくも８年目にはいろうとしている。

小林さんは調理士学校を卒業して19歳の時から料理人としての修業に励み、開店してからもたゆまぬ努力を続けてきた。こじんまりとはしているが瀟洒な店造りは、特に女性から好まれてきた。これからは気軽に入れる価格設定で、ビストロ風の料理を目指すという。「どうせやるなら、本格的に」という志がいかにも小林さんらしいところ。今回の作品「仔羊のフォアグラ詰めパイ包み焼き」の仔羊、フォアグラの材料調達から、調理手順に至るまでキメの細かさ、繊細さが光っていよう。ソースは赤ワインを煮詰め、フォン・ド・ヴォーを加えてバターで仕上げた「赤ワインソース」。力作の程がうかがえる。

撮影：板橋一明

TACHIKAWA
3

小林勇夫の Fuilleté de Selle d'Agneau au fois gras

（仔羊のフォアグラ詰めパイ包み焼き）

正月の、ひととき。すっかりお馴染みになりましたベスト立川人展。わたしたちの街には実はこんな素晴らしい人から、面白い人まで揃っている。何か、変わったことをした人というより、周りの人の気持ちを明るくした人。こういう「立川人」を一年かけて、取材した写真展。皆様、お見逃しなく。

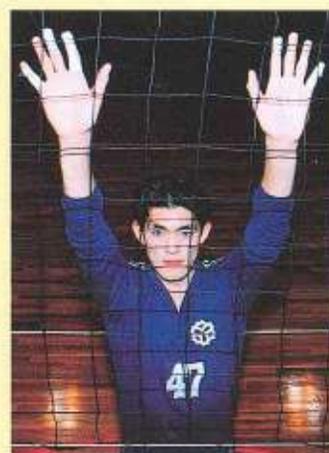
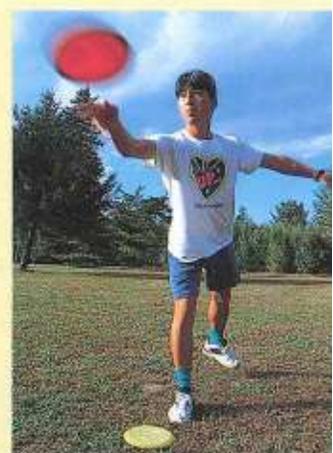
（関連記事→中面トップ）

'93
1月14日(木)～20日(水)
10:00～7:00の間
立川駅ビル・ルミネは
ガラス張りの7Fウィル
ギャラリーで開催

'92朝日小学生新聞賞、毎日小学生新聞優秀賞、東京都ＰＴＡ新聞コンクールと、学級新聞で『三冠王』を果たした、三小４年３組、32名と牧野先生（錦町）。

パラリンピック日本代表選手に選ばれた、立川養護学校バスケットボール部の４名と細田監督たち（羽衣町）。

世界中国料理コンクール銀賞受賞はリーセントパークホテル総料理長　脇屋友詞さん（富士見町）。

百歳記念に俳画展を開いた、早瀬辰次郎さん（富士見町）。

この夏、実に気持ちよくバックアタックを決めてくれたのが立川からバルセロナへ跳んだ、泉川正幸選手（西砂町）。

日本ディスク・ゴルフ協会ランキング第１位は横田　浩さん（曙町）。

四百メートル陸上60歳の部、マスターズ日本新記録達成は昭和第一学園高校教諭真鍋霊彦さん（栄町）。

毎年恒例、ミス立川の阿波踊り。右から、川島千明さん（曙町）和田利恵さん（曙町）ト部カリーナさん（上砂町）。

世界的演奏家になるための登竜門として知られる『アジア・ユース・オーケストラ』の厳しいオーディションに日本人としてただ一人の合格。神田めぐみさん（曙町）。

今や、敵無し、少年野球界の王者となった、立川アパッチ（黒木監督・錦町）。

立川トピックス

バッカリ市に野菜用

11月28、29日の両日に開催された第15回バッカリ市。例年通りの催事の中に、入場者の足はお目当てとするフリーマーケットへと流れる。その中で特別目を引いたのは、野菜で作った宝舟（写真）。立川市農業技術振興会の企画で、地元立川で採れた野菜を使って作り上げたもの。お百姓さんの手塩に掛けた野菜が、今にも船出しそうな迫力を見せている。29日の午後2時よりバッカリ市のセレモニーとして、宝舟を形づくっていた野菜は入場者に販売されたのでした。宝舟の功徳の分配として施されたかのように。

ニニ・ロッソ「真夜中」を伝授

11月27日、トランペットの世界的名手ニニ・ロッソがジャパンツアーの一環として立川でコンサートを開催（市民会館）。この日、コンサートに先立って市内の少年少女、約40名を対象に、レクチャーが行なわれた。テーマ曲は一世を風靡したあの「真夜中のトランペット」。真剣に取組むなかニニは「楽譜どおりに吹くのではなく、気持ちをいれて、情緒ゆたかに吹くことが大事です。特にこの曲は恋の表現がテーマですから」と幾度も練習を繰り返した。

真如苑だより

新しい年を迎えました。皆さま、新年あけましておめでとうございます。

毎年、当苑では「一如の鐘」（除夜の鐘）を立川の方々と信者とで仲良く百八つを撞いて新年を迎えさせていただきます。

新しい年に、「新しい心」をいれてスタートしたい気持ちになった方も、変わりないでしょう。今年もどうか、よろしくお願い申し上げます。

■日時　1月22日(水)　1時〜4時

■御本尊、真如会館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。

■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン（本誌を手渡してくれた人）」へ。

『立川人・展』では立川人の人生が額ぶち入りで展示されます。

立川人スピリットが写真とコピーで綴られる立川人展。気がつくと年を重ねて今年で8回目。今年の特徴は、人生が太巻のように詰まっていることだ。私たちの身近にお住まいの、この方は同じ立川人である私たちを不思議にもミルミル元気づけていく。

一九九二年 第九回 日本管打楽器コンクール　主催 日本音楽教育文化振興会

▲グランプリ奏者の外園祥一郎さん

▼ヨットで世界一周の北田亨・京子ご夫妻

▲マスターズ陸上の真鍋霊彦さん

時計修理名人の▶小薗井種義さん

●外園祥一郎さん（栄町）

「音大に行くよりも勉強しようと思った」と一言。愛器ユーフォニウムを吹き込むように丁寧に応えてくれるのは航空自衛隊中央音楽隊（栄町）外園祥一郎士長（23歳）。若手音楽家の登竜門として知られる日本管打楽器コンクールのユーフォニアム部門で1位に輝いた。各部門優勝者による特別演奏会でも最優秀者に選ばれ、今やグランプリ奏者。他の部門のトップは東京芸大、国立音大の学生や大学院生で趣味から音楽の世界に飛び込んで実力を積んできたのは外園士長だけ。バックが大きいとされている音楽の世界で抜群のセンスとひたむきな情熱だけで純粋に勝負した外園士長に大きな拍手を贈りたい。「音楽は努力してる人が報われるようになっている」と真剣に語ってくれる士長の言葉は長い間、忘れかけていたハートを呼び覚ましていく。

●小薗井種義さん（羽衣町）

『時計なんか治してお金にならないのに馬鹿だなあってよく言われるねえ』と語るのは、時計骨董をやっている小薗井時計店の小薗井種義さん（80歳）（羽衣町）。16の時からこの道にというから、既に64年間、あの時計屋独特のルーペ（きずみ）を右目にはめては、時計の針と共に生き抜いてきたことになる。機械化の時代に古い時計を修理できる技術者が都内でもいなくなっていることから、地方からも遠く、先祖から大事にしている年代ものなどの修理に来る人が後を絶たない。店の装飾は全く媚びてもいない。しかし、今、どこの店にもない空気を自然に伝えて、マニアを抑って、引き付けてしまうのは、小薗井さんの生き方そのものなのかもしれない。

●真鍋霊彦さん（栄町）

「本当は記録なんてどうでもいいんです。走ることで何かができないかと思っているんですがおかしいでしょうか？」と話す。走り始めたのは、全日本マスターズ陸上選手権で日本新記録を達成した、昭和第一学園（栄町）理科教諭、真鍋霊彦先生（60歳）。「何年か前、国際女子マラソンで、白いランニングパンツを真赤に染めながら、ゴールインした選手には、生命力の熱さを感じずにはいられませんでした。」高校時代、三段飛びの選手だったというが、30年のブランクを越えての挑戦。カール・ルイスのコーチとして名高い、トム・テレスに講演を聴きに行ったり、四百の日本記録保持者の高野進選手のトレーニング法からヒントを得たりして、入念にトレーニング・メニューを作り、それを確実にこなしていく。理科の先生らしく「よく研究すれば、やれる」が先生のモットー。体を投げうってのメッセージは、生徒たちばかりでなく、立川人に勇気すら与えてゆく。

●北田亨・京子ご夫妻（砂川町）

「洗濯、それともお風呂と聞かれると困る」と語るのは、ヨットで世界一周、真最中の北田亨（45歳）・京子（41歳）ご夫妻（砂川町）。二十年以上前からヨットで世界一周の夢を抱き、その為にデザイン事務所を始め十二年かけて、今年、実現に走り始めた。『家を建てて、そのローンの為に働き続ける。それができないと思ったから切り替えただけで、特別変わったことをしているとは思わない。欧米では、増えているようですが比較的、早くから達成できて、有り難い。世界各地のたくさんの人に会うのが楽しみ』と。只今バンクーバーの海。そこまでの航海で、感じたことは『他人にできるだけ迷惑はかけない。でも好意には甘えて』と。

まだまだ、登場するポートレートは。続きは会場で……

ことわざ問答 34

漢字一字挿入せよ

蛇を画きて□を添う

□を盗んで骨を施す

今月の「木の葉」は…

木枯らしに負けないあったかさ

●心にぴゅーっと北風が吹く時には、あったか〜いミネストローネスープがしみるよぉ。寒い季節はおいしさをしみじみ味わう季節でもあるのです●マカロニ、ベーコン、じゃがいも、いんげんなどなど。体の芯まであったまりそうなものがいっぱい入った具だくさんの冬の定番です●他コーンスープも共に200円。

●木枯らしに負けない第2弾は♪ペンペンペン「〝新春〟これでもか三味線」●TV、ラジオでも活躍する芸大講師三古谷裕さんがくじょんがらからポピュラー音楽まで〉三味線の魅力を存分にお届けします。●1月15日（金）5・30開演●「木の葉」立川中央公民館隣☎（22）9251●おとな1500円こども1000円（ケーキ&珈琲付）

わが少年自転車義勇隊

鈴木茂夫
（サイクルツーリスト）

私こと昭和六年生まれ、六白金星、ひつじ年、六十一歳、定職なし。立川市に定住して二十六年。自転車六台を保有、もっぱら自転車での旅を愛好する。

週日、家内と東北に遊んだ。盛岡公園に啄木の歌碑を訪ねる。紅いもみじの落ち葉が地面をおおって

不来方のお城の草に寝ころびて
　空に吸われし十五の心

いつとはなく私の少年の日へと想いはとんだ。

＊

昭和十九年、私は十三歳、台湾・台北州立第四中学校の二年生だった。その年の十月十二日から十四日までの三日間、台湾はアメリカ機動部隊の艦載機が襲来、太平洋戦争がはじまってはじめての本格的な空襲を受けた。これを契機に空襲が日常化し、危機感が深まっていた。

十一月、自転車を持っている生徒たちは市内の一カ所に集められた。台湾軍将校の少佐が壇上に立った。

「戦局は重大である。貴様たちはまだ少年ではあるが『少年自転車義勇隊』として、連絡や情報伝達に活躍してもらう」

と命じられた。少佐殿はさらにつづけた。

「貴様たちは日本人の誇りである大和魂を発揮し、チエンの油が切れたら水をかけても走らせよ」

といったのである。

いわれたとおりその後の訓練で、私たちはチエンに水をかけたが、たちまちに水は乾き、きしみ音だけが大きくなるので、大和魂を発揮するのは中止にした。少年自転車義勇隊は、祖国の危急にさいして、爆弾をかいくぐり、飛行機からの銃撃にもめげず勇敢に戦闘部隊の命令書や連絡を届けるはずであったが、現実には教員の弁当を届けたり、買い物に走らされたりするだけだった。

昭和二十年、私が三年生に進級すると、飛行場建設にかり出され、つづいて陸軍二等兵となり、まもなく敗戦となったので、義勇隊がどうなったかはわからない。

＊

四十歳を過ぎてまもなく、ふと思い立って自転車に乗りだした。体重と中性脂肪がふえ、体力の減退いちじるしいものがあったからである。

乗りこむほどに最初の自転車がもの足りず、二番目の自転車を買い求めたのは、開始から数年目である。自転車の旅の魅力にとりつかれたからだ。

夢中で走っているうちに、あたりの景色に目が移るようになる。体力と技術が身につき、余裕がでてきたのである。沿道の神社や仏閣とはずいぶん親しくもなった。

ところがである。旅にあって少年の日が突如として現出することがある。私は戦場を走る連絡員に変身しているのだ。起伏に富んだ街道のかなたの稜線から、機関銃の射撃を浴びるのではないかと身構えたりすることになるのである。背中のリュックには、重大な軍事書類がある、これを敵の手に渡してはなるものかと血わき肉踊るのである。のどかな道筋には人影もない。大声挙げて軍歌を叫び、躍動して体を前傾させ、懸命にペダルを踏む。たちまちのうちに敵から逃れて任務遂行、わが軍の勝利をもたらすという結末となる。

いい年をして、いい年だからこそ、少年自転車義勇隊の使命がよみがえる。ときにわが愛車は「ロジナンテ」、敬愛する英雄ドン・キ・ホーテの愛馬に因む。このこと、軍事機密につき他言無用に願います。

表紙は語る

まい・あーと　油絵　『Sunshine Train』 by 山川由美子

「やっぱり人物ですね。人ってどこか哀れに見えることもあるけど、それでいて、愛おしいものを同時に合わせ持っている」と語ってくれたのは、新世紀美術協会で活躍中の山川由美子さん。このサラリーマンの哀愁をも描いた、Sunshine Trainは先日、立川市民会館で行われた「多摩展」に出品された最新作。山手線の車中で、新聞片手に疲れぎみの人たちを見ているうちに、いろいろなものが浮かんできて、そこから、この構図を決めたという。「今の社会を生きることの哀れであり、健気であること。そこに生きてゆく姿を描いてゆきたい」と。『91の車中』をはじめ、山川ワールドには、どこか、誰もが感じているものが、ひたむきに描かれているせいか、切ない共鳴感で、思わず見る人の足を引き着ける。多摩総合美術展、特賞をはじめ、ホルベイン賞、石原賞、等、多くの賞を受賞。5月頃、上野の東京都美術館で行われる新世紀美術協会展で出品予定。山川さんの絵はどれも大きい。おさえた色調、簡略化された構図の中に迫力のあるメッセージがあるようだ。

立川クイズ

立川では昔、グランプリレースが行われたことがあるのです。大正13年4月20日立川飛行場で時代の最先端の自動車を集めてレースが開催されました。「立川町町制祝賀を兼ねた自動車競争大会で歓楽の人山を築き…」と当時の新聞にあります。では、この時あったエピソードのうちなかったものはつぎのどれでしょうか。

①宣伝ビラを撒いていた飛行機が墜落してしまった　②路線バスの運転手が運行途中に乗客と一緒になって見物した　③自動車が物凄い土煙をあげて走るためレースがまったく見えなかった

【12月号の答】❶

当時、江戸における富士山信仰（富士講）は大流行を極め、遠く富士まで行けない人々のために各地に富士塚と呼ばれる塚山がたくさんつくられました。現在、東京都に残っている富士塚は全部で55個所。立川には、もう一つ砂川3番に金毘羅山と呼ばれる富士塚もあります。

東風

新工房へ移って、ひと月近くになる。目と鼻の先に、成田空港行きのバス・ターミナルがある。噫呼、このバスにのれば大空港へゆけ、そこから毎日、世界は飛立つ翼が待っているのだ。なんだか、世界を大凧に例えれば、立川がその「糸目」にあたるような気分になっていた時、動物写真家の久田雅夫さんが、その着想に水を差した◆編集子が初めてパリの土を踏んだのが昭和39年、久田さんがコペンハーゲンの自然に浸って写真家を決意したのが42年。民間にもようやくパスポートがおりはじめたが、1ドル3百60円時代で、外貨の持出しに厳しい制限があった。彼の地で一日を生きていける充足感と、明日を生きてゆく不安が交錯した青春を、ふたりはある冬の夜、語り合った◆編集子も極貧のうちに北欧の真冬の旅を体験している。その途中、幾度もアンデルセンの童話が脳裏をよぎった。一夜、寒さに震え「マッチ売りの少女」の一本の寸燐の温もりを知ったのはそんな時であった。泊るあてもなく放浪をしている身に家々の灯がうらめしく感じられた◆気軽にパスポートが取れて、いくらでもドルが手に入る昨今、隣村でも行くように成田を発つけれど、20数年前に日本人がなべて持っていたものは氷解してしまった、それは「憧れ」ではなかったかと、ふたりは話し合った◆大雪の夜の静けさや　えくてびあん　●

（編集）隅川 理　名尾居真　中村鈴里　原田悦子　半沢正弘　町田健一　山田恵子
（写真）天野武男　板橋一明　井上義治　スタジオ269　桜川一巳　本多 修

ことわざ問答 答

蛇を画きて足を添う
蛇には足がない。その、ない足を描いてしまう。余計なもの、無駄なものを付け加えること。

豚を盗んで骨を施す
大きな悪事をはたらいて、ほんの少しだけ良いことをして、善人ぶること。

月刊えくてびあん　第102号
平成五年一月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市曙町2-17-5
杉田ビル6F　〒190
電話　〇四二五（28）〇〇八二
FAX　〇四二五（28）一二九七
編集人　立井啓介
発行人　沖野嘉男
印刷所　㈱大廣社

私の傑作選

NICE SHOT!

NO.18

誰のアルバムにもキラリッと光る一枚がある。
撮れた！と思った。シャッターが軽い。

山川吉久さん
（柏町1丁目）
愛機→ペンタックスーSP
■旗振

福山靖子さん
（柴崎町2丁目）
愛機→ニコンーSP
■わんぱく坊主